ルギー・カットと無縁ではないかもしれないと思われた。

1880年のベルギー建国50周年を記念するサン・カントネール宮殿入り口にある凱旋門を夕刻に訪れたが、緑色にライトアップされて、息をのむ美しさであった。

グランド・プラスの北東の丘の上には、13C建立のサン・ミッシェル大聖堂がある。昨年、ベルギー王室のフィリップ皇太子の結婚式が行われ、皇太子と雅子妃も出席された。大聖堂の内部には、前国王の結婚式当時の現天皇・皇后列席の写真の拡大パネルが、飾られていた。

京都・祇園祭の鶏鉾の重要文化財になっているゴブラン織りのタピスリーは、トロイの王子、ヘクトルが妻子に別れを告げる場面が織られているが、16C にベルギーで製作されたものであるという。

「フランダースの犬」のいわれなど、ベルギーと日本との友好関係が色濃く感じられた。

ベルギーの言語教育に関する調査・研究で、レクチャーをして下さった French Community 教育省の Dr. André Bayen は、ベルギーの色とりどりのチョコレートは「食べる宝石」であるとか、ベルギー・ビールの個人消費量は、世界一で、種類も800種類に及ぶなど、ユーモアを交えた説明もして下さった。学校訪問スケジュールやレクチャーの手配をして下さった Flemish Community 教育省の Mr. Gaby Hostens が、東京で開催された G8 教育大臣会議「G8 教育サミット」に出席されたと聞いて、感動、感激が連続したベルギー訪問であった。

『映画「アモーレス・ペロス」が描くメキシコシティ』

経営学部
丸谷雄一郎

「アモーレス・ペロス」は2000年のカンヌ映画祭批評家週間グランプリを獲得し、東京国際映画祭でもグランプリを受賞した。監督は新人のアレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥであり、ラジオ局の人気 DJ から CM 監督を経て初メガホンとなった。

映画は導入部分と3つのエピソードの4部構成である。導入部分は3つのエピソードを結びつける役割をしており、3つのエピソードの主人公達が登場するカーチェースシーンとなっている。若者と血まみれの犬をのせた車は追跡されており、追跡車を振り切ったかに見えたその瞬間に別の車に接触し、事故を起こす。

事故に関わる3つのエピソードが以下では描かれる。エピソード1はこの事故の加害者であるオクタビオと義理の姉スサナの物語である。スサナは兄と望まぬ妊娠の結果結婚し、たびたび暴力を振るわれている。オクタビオは義姉スサナを愛しているので、兄の仕打ちに耐え切れず、姉に駆け落ちを持ちかけ、その資金調達のために、兄の犬を使って闘犬で荒稼ぎをする。オクタビオとスサナは結ばれ、駆け落ちを決めるが、結局、犬は闘犬中に銃で撃たれ、スサナは兄のもとへ戻る。オクタビオは犬を撃ち殺した相手をナイフで刺し、彼らの仲間に追跡され、導入部分のカーチェースの部分へと結びつく。

エピソード2は事故の被害者であるスーパーモデルのバレリアの物語である。彼女はこの事故まで仕事も恋も順調であった。仕事は一流ブランドとの契約を獲得し、不倫相手の広告デザイナー、

ダニエルは妻と別居を決めた。ダニエルが彼女に二人で住む予定のマンションを見せ、彼が買い忘れたシャンパンを彼女が買いにいく途中で、事故は起こったのである。彼女は重症だったが一命をとりとめ、車椅子姿のまま退院する。そして、二人のマンションで彼女の愛犬リッチーとの3人暮らしが始まった。そんな矢先、リッチーが自宅の床の穴に落ちてしまう。情緒不安定な彼女は彼と会えば口げんかを繰り返し、完治していない足で床をたたき、リッチーを探す。結局、リッチーは彼に助けられるが、彼女の足は切断を余儀なくされるのである。

エピソード3は事故を目撃し、救助した殺し屋エル・チーボの物語である。彼は大学教授であったが、反体制運動に参加した結果投獄され、現在は殺し屋となっている。事故当日は仕事を依頼され、ターゲットの尾行中であった。ターゲットは依頼者の兄であった。結局、彼は依頼者とターゲットの双方を縛りあげ、依頼者のスーツや車を奪い、昔捨てた娘の家に忍び込み、貯めた金を娘に与えるためにおいて、姿を消すのである。

この映画はメキシコシティの社会階層という観点からみると非常に興味深い。舞台となったメキシコシティはアステカ帝国に遡る世界遺産にも指定される伝統的な大都市であり、時代を経るごとに地方からの人口を吸収し、現在では2000万人を超えている。こうした発展はこの映画で示される階層の格差を形成した。

メキシコはスペイン移民の末裔である富裕層と比較的早い時期に流入した人々から構成される上層階層と都市の拡大に伴って地方を追われるように流入した下層階層という2つの階層に大きく分けられる。そして、下層階層は1982年以降の新自由主義経済への移行を経て増加傾向にあり、中間階層の多くが下層へ近づくことで近年2つの階層への集約が鮮明になってきている。こうした階層は日本では認識しづらいかもしれないが、階層意識は世界的にみると一般的である。メキシコシティは時間をかけて形成された都市だけに、さまざまな階層が隣接し、交錯することになったのである。映画はそうした複雑な階層社会の関係を興味深く描いている。

エピソード1では典型的な下層階層の生活を示している。ここで描かれる家族はスーパーマーケットの従業員である兄の収入等で生活している。彼らはその日の食べ物に困るというレベルの生活ではないが、上層階層の豊かな生活が近くにあるという世界の大都会でみられる風景の中で常に金への憧れを頂いている。

エピソード2では典型的な上層階層の生活を示している。主人公はスーパーモデルであり、その周りの人々もマスコミ業界の人物であり、彼らは先進国と変わらないおしゃれな生活をしている。シャンパンでお祝い事を祝い、ペットを飼い、高層のマンションでアーバンライフを過ごしている。

エピソード3は上記の2つのエピソードとは趣が異なる。主人公の老人は大学教授という上層階層から殺し屋という下層階層へドロップアウトしており、下層階層の生活をしながら、上層階層の依頼者や娘と接している。

おそらく、監督はエピソード1では金への執着、エピソード2では物質以外のものへの欲求、エピソード3ではそれぞれの階層の隣接性を描いているのである。そして、この隣接性こそが大都市メキシコシティの特徴であり、その活力の源になっているのである。

また、この映画のタイトル「アモーレス・ペロス」は直訳すると「犬のような愛」であるが、それぞれのエピソードでの犬の使い方が各階層の特徴を示している。エピソード1では闘犬という収入を得る手段として描かれている。エピソード2ではペットという豊かさの象徴であり、愛すべき対象として描かれている。エピソード3では双方の性格を持つ犬が混在し、最終的にはペットとしての犬が闘犬に全て殺されてしまうという結末を迎える。まさに、多様な階層の同居の難しさが象徴的に示されているのである。

このように真面目な議論をすると、この映画が小難しい内容のものに捉えられてしまうかもしれない。しかし、この映画は決して難しい内容の作

品ではなく、監督のDJからCM監督といった経歴を反映して、エンターテイメント性にも溢れている。特に、全編に流れる音楽はメキシコの伝統的音楽マリアッチではなく、ロック・エン・エスパニョールと呼ばれるスペイン語のロックであり、画面に臨場感を出している。メキシコ人は音楽好きであり、街には音楽が溢れているが、その多くは決して伝統的な音楽ではなく、米国のロックがラテン風にアレンジされ、独自の進化を遂げたものなのである。

また、どこか土着的な雰囲気も魅力的である。話題を呼んだハリウッド映画「メキシカン」や「トラフィック」もメキシコを舞台にしている。しかし、この映画はこれらの映画と根本的に異なる土着的な雰囲気がある。この映画と比較すると、上記の2つの映画はメキシコの外面的な部分しか捉えていないと感じる。「トラフィック」は筆者も作品的には非常に優れていると思うが、そこで描かれるメキシコはハリウッド映画の粋を出ておらず、当然のことながら、米国人からみたメキシコなのである。社会階層や文化を知ることは語学を学ぶ上で不可欠であると思うが、この映画はそういった意味で非常に優れた題材であるといえる。また、映画を通じて、日本人が意識しにくい階層といった見えない壁の一端を理解できるかもしれない。